世帯数　6,081戸
人　口　13,960人
（令和3.11.1現在）

第10回寿地区福祉の文化祭
福祉の絆　作品展示・交換

令和３年９月から10月にかけ、第10回寿地区福祉の文化祭（以下福祉の文化祭）『福祉の絆　作品展示・交換』が福祉の文化祭実行委員会主催で開催されました。

例年福祉の文化祭は寿体育館を会場とし、地区の子どもたちと障がい者福祉施設の利用者の方々が一緒に歌を歌ったり踊ったりする直接交流を行っていましたが、今年は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、内容と方法を工夫して開催する形となりました。

寿小学校４年１組作品

特別養護老人ホーム真寿園作品

寿地区には介護老人施設寿の里、特別養護老人ホーム真寿園、社会福祉法人アルプス福祉会ねくすと、社会福祉法人アルプス福祉会コムハウス、特別非営利活動法人ハートライン松本、社会福祉法人中信社会福祉協会みすぎの森の障がい者福祉施設があり、寿地区福祉ひろばとあわせ７施設と寿小学校３学年及び４学年の７クラスがそれぞれ、思い思いの作品を制作。完成した作品は公民館の職員が施設または小学校に届け、作品を展示し合う形となりました。

小学校の教室に飾られると、普段見ることのない福祉施設の見事な作品に、児童たちは笑顔で手に触れたり、興味深そうに鑑賞していました。

これら14作品は、11月７日から12日までに寿公民館和室で開催された第44回寿地区文化祭で展示されました。

※寿地区文化祭の報告については、次回１月30日号にて掲載する予定です。

【寿公民館】

令和３年度 松本市市民体育大会結果

軟式野球……ブロック優勝
卓球……第３位
マレットゴルフ……第15位
ソフトボール……準優勝

令和３年度 市長杯争奪球技大会結果

ママさんバレーボール……中止
卓球……優勝

どの競技も大変がんばって
いただきました。お疲れ様でした！

192サロン 親子体操でリフレッシュ！

９月21日㈫、寿体育館にて子育て支援１９２サロン運営委員会主催による「親子体操でリフレッシュ」が新型コロナウイルス感染拡大防止対策の上、開催されました。

講師にｗｉｎｇまつもとの西澤先生をお招きし、子育て奮闘中の親子が受講されました。会場には、受講中の子守や子育てについての相談相手にと経験豊かなスタッフが揃い安心感がありました。また、保護者が安心して受講できるように託児スペースが設置されお子さんが元気に楽しんでいました。講座では、家庭での心身のリフレッシュ法として座ってできる体操や音楽に合わせた体操を実践し、受講者のコロナ禍のストレスも少し和らいだのではないかと思います。活動を通して多くの親子が心と体の健康を守っていただきたいと思います。

【館報編集委員　大村健司】

ことぶき地元サポーター養成講座

９月30日㈭午後７時から、寿公民館大会議室において地元サポーター養成講座が開催され、17名の方が参加されました。この講座は全４回開催するもので、第１回の「『ボランティア』ってなあに？」に参加しました。

講師に松本市社会福祉協議会ボランティアセンターの塩原係長をお招きし、ボランティアってそもそも何をすればいいのかを学びました。

質疑応答では、一人ぐらしへの不安、ご近所とのコミュニケーションの取り方などの話が出ました。少子高齢化が加速する現代、かつてのように介護や子育てを家庭だけで担う事が難しくなっています。暮らしの中のちょっとした困り事に悩んでいる方が増えています。そこには「お互いさまの助け合い」が大切だと感じました。それがボランティアへの一歩に繋がると思います。

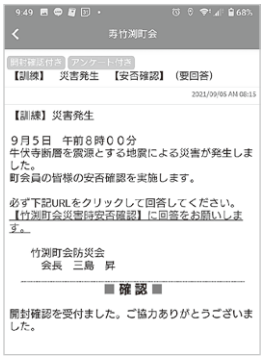
【館報編集委員　須山浩二】

わがまち取り組み

竹渕町会の取り組みを紹介します。

LINE、Facebook、Twitter等々、SNSを利用した、情報発信や収集が、容易になってきました。幼稚園・保育所から学校、職場の連絡網ももはやメール配信が主流となりました。そのような時代の流れの中で、竹渕町会ではメール配信による情報発信を「あんしんメール」というアプリを活用して運用を始め、3年ほどになります。

そこで、町会としてこのような事業をはじめた思いと、運営状況、展望などを町会長に伺いました。まずは、松本地震の教訓から町会としての危機管理の課題への対応があります。通常時、「あんしんメール」は、河川清掃のお知らせ、検診のお知らせ等を配信しています。



真価を発揮できるのは、災害時安否確認です。メールに対して、安否を返信することができます。本年9月の防災訓練にあたっては、コロナ禍のなかでも、「あんしんメール」を活用した安否確認訓練が実施されております。以前は黄色い旗を掲げるなどしていたものです。災害時、この情報によって迅速に要救助者の救助につなげることが可能になります。

まだまだ試行錯誤が続いていますが、昨今、温暖化の影響か災害の頻発が懸念されており地域の中で素早い情報発信と安否確認が、余裕を持った退避行動や救助活動の助けになり、住民の命を守る行動につなげられると思います。

このような取り組みを行っている町会は、町会長によれば、寿地区はもちろん、松本市内でもないのではないかということです。現在のところ、登録件数は500件程度ということですが、市ホームページの町会別人口世帯数から計算しますと町会の約半数の世帯が「あんしんメール」に登録していることになります。

さらに、町会では、「あんしんメール」を活用したコスト削減の取り組みが検討されており、今後の更なる展開が期待されます。

【館報編集委員　上平貴明】

エピソードで綴る寿の歴史③
決定版　銀次郎伝説

下瀬黒に「侠客銀次郎の墓」が立っています。この銀次郎については「百瀬公民館報アカシヤ2号」や「寿の民話」にその伝承が載せられています。その概要は「慶応3年（1867）神田の豊次郎親分の子分に幾左衛門（絵堂の正太郎）がいてその子分に銀次郎という者がおりました。何かの争いで銀次郎は仲間の仙十の父親を切ったため、仙十に狙われるようになります。ある日、銀次郎が幾左衛門の所で酒を飲み帰宅し、家の二階の窓を開けたまま寝入りました。仙十は家の前の山に陣取り鉄砲で2発撃ち、山を駆け下りて二階へ踏み込み銀次郎に二太刀切りつけました。そして仙十は逃げ去ります。この報を聞きつけた幾左衛門の妻が駆け付け介抱しますが銀次郎は「鉄砲とは悔しいぞ」といって息絶えました。後に豊次郎の後継者茂次郎が事件から29年経った明治26年5月4日に銀次郎の墓を下瀬黒に立てました。

この事件は旗本領百瀬陣屋の「御用日記」に記されています。期日は慶応2年5月4日で伝承とは1年ずれています。

慶応2年の4月末頃、13年前に不都合があって下瀬黒村を出奔した政太郎（銀次郎のこと）が親類の手引きで当時の白姫村山岸に帰ってきて借家住まいを始めていました。政太郎は出奔後、美濃国で名の通った博徒の養子となり子分20～30人の親分になっていました。幕府の取り締まりが厳しくなったためか妻と子分2人を連れて故郷へ帰って来たのです。これを知った仙十は5月4日朝5時頃、表戸・雨戸を押し開けて13人が抜き身を提げて侵入しました。政太郎（銀次郎）は二階でこと切れ、子分の1人は軒下で息絶え、もう1人は重傷を負っていました。百瀬陣屋と下瀬黒村は、政太郎がすでに宗門帳から外された無宿者であるから当知行所は一切関係ないと関わりませんでした。伝承では仙十の単独犯行のように語られていますが、実際は違っていました。御用日記には高島藩の調査結果が書かれていますが鉄砲の使用は見当たりません。しかし、百瀬陣屋から領主のいる江戸屋敷へ宛てた御用状には「（政太郎）先月中旬ころ、長脇差しの類にあいなり、子分4～5人召し連れ当地へ罷りこし、近村、御分知白姫村に住みそうろう由のところ、同職の者意趣遺恨出来、13人抜き身を提げ、または短筒、手鑓を持ち、当4日暁、鉄砲にて撃ち殺し逃げ去りそうろう…」とあり、やはり伝承通り鉄砲が使われていたのではないかと思われます。結局この始末に掛かった費用は政太郎（銀次郎）が無宿人ということで村方負担ではなく、一類3人が負担しています。合計金額は175両余となりました。（1両10万円として換算すれば1750万円）幕末、世相が騒然としていた事は承知していま民間の鉄砲や短筒がこの様な場で使われていたことに改めて驚かされます。

【寿史談会顧問　青木教司】

百瀬銀次郎の墓